




## 事業報告書

「介護のある暮らしと働き方 ～介護で仕事をあきらめない～」	
日時	2017 年 11 月 25 日（土）14：00～16：00
対象	関心のある方
講師	津止 正敏氏（立命館大学産業社会学部 現代社会学科 教授）
主催	沖縄県・公益財団法人おきなわ女性財団
会場	沖縄県男女共同参画センター「ているる」研修室
定員	40 名
参加者数	23 名（男性 6 名 女性 15 名）
内容 （概要）	<p>京都市社会福祉協議会での地域福祉部長、ボランティアセンター長の経歴も持つ立命館大学産業社会学部教授の津止正敏氏を講師に迎えての講座。</p> <p>経済誌の特集などを見ても如実である通り、介護はますます身近なものとなり、有業者の実に 4 人に 1 人が介護に関わっているにも関わらず、介護と仕事の両立には多大な困難を伴う。</p> <p>講師は、2009 年に男性介護者支援のネットワークを立ち上げ、そこで編集した「介護体験記」が社会的に大きな反響を呼んだが、その背景には「家族責任」や「男らしさ」といった社会規範により孤立してしまったり、「介護虐待」の加害者となる比率が高かったりする『男性介護』の問題があるとし、男性介護者の会の組織化が必要とされていることを紹介。</p> <p>次に 1968 年の新聞記事との対比から読み取れる新しい介護実態について説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「想定外」介護者による介護…男性/老老/認認/老障/障障/シングル/ヤング/別居/通い/複数介護</li> <li>・「ながら」の介護…通い/子育て/働き/修学・就活・婚活/通院・通所しながらの介護</li> </ul> <p>さらに、講師は「介護感情の両極性」として介護のある暮らしに負担を感じながらも同時に喜びを感じている介護者の生の声を紹介し、人は皆人生において「認知症」や「介護」に出会う機会が多くなるが、その経験を通して過去を振り返ることができる等、必ず『より深い人生』を送れるようになること述べた。身につまされる話に頭を垂れて聞いていた受講者は顔を上げ、「介護のある暮らしや働き方を社会の標準に」しなければいけないという講師の言葉に深く頷いていた。</p>
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>津止 正敏氏</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>受講風景</p> </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div>
受講者の声 （抜粋）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「介護のカタチ」の変容している事の情報には社会にあふれているが、実際は身近なものとして捉えている人は少ない気がします。介護のある暮らしや働き方を社会の標準にしていくには、もっと多くの方が自分自身のことと受け止め知識を得なければいけないと思います。</li> <li>・介護をマイナスと捉えるのではなく、できることを工夫して、現在の生活に明るいことを見つけていこうと考えられました。職場にカミングアウトすることは重要だと感じました。これからの生活が明るくなってきました。また勉強していく意欲も出てきました。</li> <li>・とても胸がいっぱいです。”男性”に特化した会で賛否もあるようですが、現在、ビジネス界を担っているのは男性の方が多いので（良いかどうかは別として）、介護を自分のものとして捉える事が男性間でより浸透しやすくなり、介護者を支援する社会作りへの近道になるのでは？と感じました。又、結果的にそれが女性の負担減や支援にもつながるとも。</li> </ul>